

「miss-lonely@」

(ミス・ロンリー・アットマーク)

池田真也

「miss-lonely@」にひらく

この作品はヒッチコック監督『裏窓』をモチーフに、「OLが隣のビルの中を覗いているうちに、事件に巻き込まれる」というミステリーです。

主人公のOLがインターネットで「miss-lonely」という女性が個人で作っているホームページを見つけます。そこに書かれた会社での日常をつづった日記から、「miss-lonely」が主人公の向かいにあるビルのOLであることがわかります。主人公は「miss-lonely」に興味を持ち、仕事の合間に「覗き」を行うのですが、「miss-lonely」の日記に書かれたことをヒントに隣ビルのオフィスの人間関係が主人公にもわかってきます。最初は楽しんでいた主人公でしたが、傷害事件に巻き込まれてしまい、最後は主人公と、彼女と恋人未満の同僚が解決するというストーリーです。

全体のトーンは主人公のOLと恋人未満の同僚のラブコメタッチにし、覗きの楽しさと、被害者と思っていた男性が実は犯人だったというどんでん返し、最初は乗り気じゃなかった同僚の男性が主人公を救いに行くアクションがキーポイントです。

主な登場人物は、主人公、同僚、窓から見える女、その恋人の男2

人女2人ですが、覗かれる会社の社員にキャラクターを持たせ、全ての登場人物に性格がわかるようなセリフを用意しています。覗かれる側は動きだけでキャラクターを表現しなければならないので、演じる側としても面白いと思います。

miss・lonely の会社

新東洋サテライト㈱

中央区築地、西劇ビル6階

CS放送の事業所。新東洋映画㈱(映画会社)の子会社。

総務部

経理部

営業部

1課・・・全国のケーブルテレビに対する加入促進の営業

2課・・・営業CMの広告取り

宣伝部・・・番組ガイド紙、マスコミへの宣伝などを扱う

構成部

1課・・・映画専門チャンネルの作品購入と番組編成

2課・・・テレビドラマ専門チャンネルの作品購入と番組編成

製作部・・・劇場用映画への出資

亜紀の会社

㈱くわいえつと・らいふ

中央区築地、三晃ビル6階。西劇ビルと道路をはさんで隣に位置する。

マンションのエクステリア(外装)を行う会社。

大手住宅会社、三晃住宅の子会社。

総務部

経理部

営業部

企画部・・・マンション外壁のデザイン。(デザイナー系で私服が多い)

開発部・・・設計図を書く

登場人物

榊くわいせつと・ひろみ

古内亜紀 ふるうちあき(19)

主人公。経理部

宮本俊之 みやもととしゆき(23)

営業部、亜紀と同期入社。

浅野和夫 あさのかずお(30)

既婚。一女あり。

経理課長。口うるさくてセクハラ発言も多く亜紀からは嫌われている。

部長から叱責されることも多く、プレッシャーを感じている。

繊細な性格で家庭では娘を可愛がるよいパパだが、ストレス発散のためキャバクラに通うようになり、池袋のキャバクラ嬢「マリナちゃん」に夢中。

新東洋サテライト榊

服部範子 はつりのりい(24)

地元の短大を卒業後上京し新東洋サテライトに入社。

構成部に所属し、購入費や制作費などの経理的な仕事をしている。

星山秀雄 ほしやまひでお(28)

新東洋映画入社後、新東洋サテライトに出向。

幹部候補。営業2課

並木徹 なみきとおる(35)

構成部長

能力があるわけではないが、社長の威光を借りて出世した。権力を笠に来て、横柄な態度をとるために、他の社員や取引先から嫌われている。

森川陽司 もりかわようじ(25)

営業1課

温厚でまじめな性格。範子のことを慕っている。

仲田 寛 なかだひろし(27)

宣伝部

由香里にしつこくつきまどっている。神経質で細かいことにうるさい。

神田信一 かんだしんいち(20)

今春入社した新人。上司の並木からいじめに近い叱責を日ごろから受けている。
構成1課

真中由香里 まなかゆかり(20)

総務部

仲田からストーカーまがいの被害にあっている。

飯島鈴江 いいじますずえ(28)

経理部

23で結婚するが26のとき離婚。噂話が大好き。

遠山伸久 とおやまのぶひち(60)

代表取締役社長

社外

遠山直美 とおやまなおみ(22)

遠山の娘。星山の婚約者

進藤武雄 しんどうたけお(35)

警備員

○(株)くわいえつと・らいふ、オフィス

とあるビルの6階にあるオフィス。

経理部の古内亜紀(20)は浅野課長のデスクの前に立ち、うなだれている。

上司の浅野和夫(30)が亜紀の作成した予算編成表のレポートに書き間違いがあったことをとがめている。

浅野「君、仕事をなんだと思っただよ！部課長会議3時からだぞ。こんないい加減な資料持つって、上から怒られるの俺なんだよ」

亜紀「・・・すみません」

浅野「毎晩遊びまわってるから集中力がなくなるんじゃないの？」

亜紀「遊びまわってなんていません」

浅野「どうせそうだろ。仕事なんて結婚するまでの時間つぶしぐらいにしか考えてないんだろ。いいよな、気楽で」

亜紀「そんな・・・」

浅野「時間がないんだよ！とにかく大至急直してよ。大至急」

浅野、時計を見ると十一時を指している。迫りくる月に一度の部課長会議に平静でいられないのだ。

浅野「ああ、もう」

ふて腐れた顔で自分の座席に戻る亜紀。

隣の島、営業部の宮本俊之(23)が亜紀に向かって「お気の毒様」と両手を広げる。

亜紀、さりげなく俊之に向かって、親指を突き出し下に向ける

「BOO」サインを出す。

○同 昼休み

社員たちが食事から戻りはじめる中、ひとり黙々とパソコンの

キーボードを打ちつづけている亜紀。

俊之「古内。ほら」

俊之が亜紀にコーヒーを差し出す。

亜紀「サンキュー、宮本くん。お腹すいたよー」

亜紀、手を止めて椅子にもたれる。

俊之「なに怒られてんだよ」

亜紀、レポートを俊之に見せる。間違えたところに赤い丸が書かれている。

再びキーボードを打ち始める亜紀。

亜紀「そんな細かいところまで誰も見ないよ」

俊之「浅野さんも毎月今ごろになると神経質になるよな」

俊之、亜紀の机に飾ってある、アメリカの画家、エドワード・ホッパーのポストカードを手に取る。森の近くにひっそりと立っているガソリン・スタンドの絵が描かれている。

俊之「古内って変なの好きだよなあ」

亜紀「見ないでよ」

亜紀、ポストカードを俊之から取り上げて再びパソコンに向かう。

亜紀「直しの入ったレポートをあごでしゃくって」それとは別にさ、これ会議までに仕上げるだつて。お昼前に言うんだよ（小声で）あいつぶつ殺す」
俊之「あら、はしたない」

俊之、口を手で押さえる。

亜紀も口を手で押さえる。

窓から外を見る俊之。なにか面白いものを見つけたようだ。

俊之「おい古内。ちよつとあれ見てみるよ」

亜紀、俊之に言われて窓の外を見る。

俊之「似たようなのがあるぜ」

道路をはさんで隣に位置する西劇ビルの6階にある、「新東洋サテライト(株)」のオフィスの中が見える。

○(株)くわいえつと・らいふから見た新東洋サテライト(株)のオフィス

服部範子(25)が部長の並木徹(35)のデスクの前で叱責されている。

○(株)くわいえつと・らいふ、オフィス

隣ビルを眺める俊之と亜紀。

俊之「アナウンサーの実況の口調で」OL1号、怒られております。なにを
しでかしたのでしょうか」

○(株)くわいえつと・らいふから見た新東洋サテライト(株)のオフィス

範子を叱っている並木。

範子、並木に謝りながら何度も頭を下げる。

俊之の声「隣ビルでの会話を想像しながら彼らの動きにセリフをあてる」『お前のような使えない奴はクビだ。荷物をまとめてさっさと田舎に帰れ』
『そんなこと言わないでください。私にはもう帰る故郷はないんです』

食事から戻ってきた社長の遠山伸久(9)が並木を呼ぶ。
並木は立ち上がり走って行く。

その途中並木はつまづいて転んでしまいがすぐに起き上がり、
社長のもとに行く。

俊之の声「偉い人に呼ばれました。大急ぎで走っていきます。わんわんわん。
おおっと転んでしまいました。これは痛いぞ。しかし立ち上がります。
不屈の精神だ。『社長、肩でもこりましたか』『うん部長君。ちよっと
背中がかゆくてね』」

タイミングよく背中に手を回す遠山。

並木から解放された範子は自分の席にもどり、自分で作った弁
当を食べ始める。

俊之の声「こちらは1時間ぶりに解放されたOL1号です。『クソ部長。わたし
を怒らせて。風の強い夜道は気をつけなさいよ。嫌ン嫌ンもう』。お弁
当を広げました。怒られた後でも腹が減っています」

経理部の飯島鈴江(10)が範子のもとにやってきて、何か誘って
いるようだ。

俊之の声「あ、OL2号がやってきました。『OL1号こんにちは！昨日はちゃ
んと歯をみがいたかな？』合コンの誘いでしょうか。『全然大した男来
ないんだけど、頭数揃わないのよ。ただ飯食べにきてくれない。ご飯
とキャベツのおかわり自由だっというからさ』」

範子は謝りながら首をふる。

俊之の声「『わたしあなたと違って男なら腐ッ^くさるほどいるの。ごめんあそば
せ』」

鈴江は残念そうに去っていくと、範子は再び弁当を食べ始める。

○(株)くわいえつと・らいふ

俊之「OL1号手をつけているのはウインナーでしょうか。もしかしたら夕

コ^コの形かもしれない」

範子を見つめる亜紀。

亜紀「あの人・・・いつも一人でお弁当食べてる」

○(株)くわいえつと・らいふから見た新東洋サテライト(株)のオフィス

手作りの弁当を一人で食べている範子。

○亜紀の部屋。夜

亜紀、インターネットでエドワード・ホッパを検索する。
666件のヒット。画像の多いページを開き、絵を見る亜紀。
検索一覧に戻るとあるページに目に止まる。

亜紀『「エドワード・ホッパがなによりも好きです」・・・へえ」

クリックすると「miss-lonelyのホームページ」が出てくる。

○ホームページの画面

トップページ。miss-lonelyの簡単なプロフィール。

「エドワード・ホッパがなによりも好きです・・・」

○ホームページの文面を読む亜紀

亜紀「一番好き絵は『ニューヨークの映画館』。世界はこんなに美しいのに、
どうして自分だけが寂しいんだろうと思っていたときにこの絵にめぐ
りあいました」

○ホームページの画面

日記クリック。

「2月15日 今日会社のことを書いてみる」

○ホームページの文面を読む亜紀

亜紀「今日は伝表に間違いがあつて部長にひどく怒られた。あんなひどい言
い方しなくてもいいと思う。」

○亜紀の回想、昼間隣のビルで彼女が見たこと

範子を叱っている並木。

範子、並木に謝りながら何度も頭を下げる。

食事から戻ってきた社長の遠山が並木を呼ぶ。

並木は立ち上がり走って行く。

その途中並木はつまづいて転んでしまうがすぐに起き上がり、
社長のもとに行く。

範子の声「同じことを何度も言われてうんざりしていたところに、社長が帰っ
てきた。部長はそれまでとは別人になったように社長のもとに走って行
く。途中つまづいて転んでしまい、思わず笑いそうになってしまった。
社長のもとに来た部長は普段のいばった態度とは違ってかわって、子犬
のようにおとなしくなる」

○ホームページを読んでいる亜紀
亜紀「あれ？」

○亜紀の回想、昼間隣のビルで彼女が見たこと

並木から解放された範子は自分の席にもどり、自分で作った弁当を食べ始める。

経理部の飯島鈴江(88)が範子のもとにやってきて、何か誘っているようだ。

範子は謝りながら首をふる。

範子の声「部長から解放されてお弁当を食べているとS(鈴江)がやってきた。

合コンに来ないかという誘いだったが断った。私が☆とお付き合いしていることはだれも知らないようだ。彼女が聞いたらどんな顔をするだろう。でも後からせつかく誘ってくれたのに悪いことをしたと思った。あまり付き合いが悪いと本当に一人きりになってしまいそうな気がする」
鈴江は残念そうに去っていくと、範子は再び弁当を食べ始める。

○ホームページを読む亜紀

亜紀「みんなの輪に入っても浮いているような気がするのだが、それでも一人で食べるお昼ごはんはやっぱり寂しい」

○憐くわいえっと・らいふ

浅野、パソコンのキーボードを叩くのをやめると、ファイルを保存して印刷ボタンを押す。パソコンの電源を「切断する」にするため息をつき、デスクに飾られた写真たてを見る。

浅野の娘(1)が笑っている写真。

気合を入れて立ち上がる浅野。

プリンターからでてくるファイルを待ちながら

浅野「古内くん。本社行ってくる」

亜紀「いつてらっしゃい」

浅野「笑いながら)なんか今日化粧濃いんじゃない？」

亜紀「そうですか」

浅野「今夜彼氏と会うの？」

亜紀「そんな人いませんよ」

浅野「またまた。楽しんできてよ、思う存分」

ムツとしながらも作り笑いをする亜紀。

プリンターから書類が出てくると、それを手に取り出て行く浅野。

亜紀、手を止めると「やっつけられない」という気持ちで椅子にもたれかかる。

窓から空を眺める。雲ひとつない青空が広がっている。

ひとり言を言う亜紀。

亜紀「・・・ぶっ殺す」

社員の驚いた視線が一斉に亜紀に集まる。

社内の凍りついた視線に気がついた亜紀、恐る恐る顔を前に戻す。

一斉に顔を伏せる社員たち。

俊之だけが亜紀のほうを見て、「あら、はしたない」と口を押さえて笑っている。

照れくさそうに口を押さえて仕事を再開する亜紀。

俊之が亜紀のデスクに来て伝票を渡す。

俊之「あら、はしたない人がいる」

亜紀「聞こえた？」

大きく頷く俊之。

俊之「ずうーっと向こうの島まで」

亜紀「あーん、お嫁にいけないよお」

俊之「・・・もらってやろうか」

亜紀「めちゃくちゃ失礼！それ置いてさっさと仕事に戻る！」

俊之「まあ気にすんなよ。浅野さんもあれで結構ストレスたまってるんだぜ。

上の方からいろいろ言われてるし」

亜紀「あいつといると一日二十五回は仕事辞めようと思うね」

俊之「面白いこと教えてやろうか。浅野さんキャバクラに、はまってんだよ」

亜紀「うそ。なんで知ってるのよ？」

俊之「(亜紀のパソコンをさわりながら)みんな知ってるよ。飲むたびにその

話だもん」

亜紀「宮本くんも一緒に行っただんでしょ」

俊之「俺が行くわけじゃないじゃん・・・ほら」

パソコンの画面にキャバクラ嬢の写真が出る。

「池袋、星の王子様」の「マリナちゃん」

俊之「お気に入りなんだって」

亜紀「(俊之に向かって) バッカじゃないの！」

俊之「俺に言うなよ」

亜紀「どいつもこいつも・・・」

亜紀、窓の外を眺める。「新東洋サテライト」のオフィスが見える。

亜紀「ねえ、ちよつとあれ見て」

マウスをつかむと「お気に入りに入り」から「miss-lonelyの部屋」を開くと、隣ビルを指差す。

亜紀「あそこのビルでさ、ピンクのカーディガン着ている人わかる」

俊之「・・・ああ、OL1号か」

亜紀「この『miss-lonely』って、(隣ビルを指して)あの人だよ」

俊之「ええ？」

○ 憐くわいえつと・らいふから見た(株)新東洋サテライトのオフィス

範子が会社に来た郵便を社員たちに配りながら、オフィスの中を歩き回っている。

○ 憐くわいえつと・らいふ、オフィス

亜紀と俊之、パソコンで「miss-lonelyの部屋」を見ている。

亜紀「私の会社は築地にある。社員30人ほどの小さな会社だが、色々な面白い人がいる」

○ 憐くわいえつと・らいふから見た(株)新東洋サテライトのオフィス

範子の声「部長はとても評判が悪い。社長の前では卑屈なぐらいペコペコするが、いなくなるとたんに横柄になる。かわいそうなKくん(神田君)は今日も部長にいじめられていた。他の部署や取引先からも評判が悪く、今の社長が引退すれば会社にいらなくなるだろうとS(鈴江)が言っていた」

遠山、並木、神田、森川の動き

遠山社長が出かけようとしている。並木は社長の後についていく。

遠山が背中越しに新東洋サテライトを上げると、並木は「いつてらっしゃい」と深々と礼をする。

遠山が去った後、自分のデスクに戻り神田を呼ぶ。

とぼとぼとやってくる神田。

並木、神田の書いたレポートを振りながら「お前やる気あるのか」と叱責を始める。

神田は並木の前でうなだれている。

並木、神田にレポートを投げつける。紙がひらひらと神田のまわりで舞う。

森川が並木のもとにやってきて「電話ですよ」と伝える。

並木、神田に「行け」と追い払う手つきをする。

自分の席に戻っていく神田を森川がなぐさめる。

神田の背中を叩きながら、激励する森川。

肩を落として自分の席に戻っていく神田。

範子の声「Y(由香里)はN(仲田)からストーカーまがいのことをされているよう

だ。帰り道によく待ち伏せされているらしい。仕事中にNから熱烈なメ

ールが届いたのを、彼女はS(鈴江)に転送した。Sの口から社内全員に

広まるのだろう。かわいい顔して恐ろしいことをする娘だ」

由香里、仲田、鈴江の動き。

由香里の机の上に山のようになった資料が積まれている。

由香里、それを持って立ち上がり、会議室に入っていく。

由香里、このあとの会議で使う、資料を机の上に並べ始める。

仲田が会議室に入ってくる。

「手伝おうか」と仲田は言うが、由香里はいいですと断る。

由香里に近づいてくる仲田。

由香里、仲田から逃げるように部屋の奥に行く。

何か言いながら、由香里に近づく仲田。

由香里、電話の受話器を取り、内線で鈴江に電話する。

電話を取る鈴江。

由香里、暗号で鈴江に「助けて」という意味のことを言う。

鈴江、立ち上がると受話器を置くと会議室に向かう。

鈴江、会議室に入ってくる。

「手伝おうか」と言いながら由香里に近づいていく。

仲田が部屋から出て行く。

由香里が鈴江に何か愚痴っている。

鈴江、由香里から資料を半分受け取ると、ふたりで机の上に並べ始める。

会議室から出た仲田。由香里の方を気にしながら去っていく。

仲田、由香里の机の前に行く。

あたりを見回して、だれもこっちを見ていないことを確認すると、由香里の上に置いてあった彼女の手帳を取り、すばやく内

ポケットに入れる。

範子の声「火災訓練に備えて棚の上に置かれた荷物を片付けていたら、Mくん

(森川)が手伝ってくれた。S(鈴江)によれば私に気があるらしい。

随分前から、私が気がつかなかったという疎いと言われた。

私が☆とお付き合っていることを誰も知らないのだ

範子がロッカーの上に積まれた荷物を降ろしている。

そこに森川がやってきて、手伝うよという。

範子「ありがとう」といい、椅子から降りる。

森川が範子のかわりに椅子に乗ると、範子の指示を仰ぎながら荷物を降ろしていく。

森川、椅子から降りる。

森川と範子、床に並べられた荷物を抱えてオフィス奥にある倉庫のほうに消えていく。

○パソコンの画面。「miss-lonelyのページ」

範子の声「☆はから2週間も連絡がない。会社でも私を避けているようだ」

○ 亜紀の部屋

パソコンの画面を見ている亜紀。

亜紀「☆^{ほし}つて誰なんだろう」

○ 情景

冬の東京。

寂しげな風景。

○(株)くわいえつと・らいふ、オフィス

無言でキーボードを叩いている亜紀。

俊之が重い足取りで亜紀に近づいてくる。

亜紀は俊之が来ても顔を上げようとしなない。

俊之「・・・これ」

俊之、亜紀に伝票を渡す。

亜紀「お疲れ様です」

亜紀、俊之から無愛想に伝票を受け取ると、デスクの脇に置き、

再びキーボードを叩き始める。

俊之「・・・まだ怒ってる？」

亜紀「怒ってないよ」

俊之「なあ、謝っただろ」

亜紀「だから怒ってないって言ってるでしょ」

俊之「・・・」

俊之、きびすを返して去っていく。

亜紀、顔を上げて俊之の後姿を見る。

仲直りしたいけれど素直になれない亜紀。

○ 憫くわいえつと・らいふから見た新東洋サテライトオフィス

範子の声「☆からの電話を待ちながら、今日はずっとアルバムを見ていた。ふたりで神戸に言ったときの写真だ。ポートタワーから彼と一緒に見た夜景は本当に綺麗だったことを覚えている」

範子が星山の背中に話し掛ける。

星山手を振って仕事中だから後にしてくれという。

それでも星山に話し掛ける範子。

星山、人目を気にしながら立ち上がり、範子を窓際に連れて行きなだめる。

鈴江が星山を呼ぶ。

社長の娘である遠山直美(22)が星山をたずねてきたのだ。

範子の声「☆の顔はどれもふざけたものばかりだが、私を笑わそうとしてくれる時の彼が私は一番好きだ。

三宮センター街のアンティークショップで彼が買ってくれた、バリ島の手鏡は今でも大切に使っている」

応接室に消えていくふたり。

応接室に入ると星山と直美は抱き合う。

ノックがされてふたりはあわてて離れる。

直美の父親遠山が入ってくる。

椅子に座る3人。ふたりの結婚についての話し合い。

範子は並木に命じられて応接室にお茶を持っていく。

範子の声「あの頃の☆は優しかった。ちよっと恥ずかしくなるような手紙を毎週のように私に書いてくれた。

なぜ電話をくれなくなったのだろう。会社でも素っ気無くて、私が話し掛けようとしても逃げられてしまう。

私にどこか、いけないところがあったのだろうか」

お茶を持って範子が応接室に入ってくる。

星山は範子と目を合わせようとしない。動揺した範子はお茶をこぼして直美にかけてしまう。

平謝りの範子。

直美と遠山が範子に怒る。顔をそむけている星山。

○(株)くわいえつと・らいふ、オフィス

窓から外を見ている亜紀。

範子の声「近い将来、楽しい写真ばかりたくさん撮ったことを、後悔するときがくるような気がする」

○(株)くわいえつと・らいふから見た新東洋サテライト

考え事をしながらゆっくりとした足取りでオフィスの中を歩いている範子。あの女の人は誰なんだろう？

寂しげな足取り。

○公園前の道

暖かい昼下がり。

同僚たちと歩いている亜紀。

公園の前を通りかかる。

範子が一人でお弁当を食べている。

歩きながら範子を見つめる亜紀。

箸を止めて、考えごとをしている範子。

○居酒屋

範子、森川、鈴江、由香里、神田の5人がテーブルに座っている。

森川は少し飲んだだけで眠ってしまう。

神田が寝ている森川にいたずらをしている。

神田が森川の開いた口の中に、ストローでサワーを入れる。

森川はそれをちゅーちゅーと吸う。

大受けする鈴江と由香里。

由香里は悪乗りして、森川の口の中にモロキューを入れようとする。

横で楽しそうに笑って見ている範子。

都会の片隅でひっそりと生きている女の子のとある1シーン。

範子の声「いまだに信じられない。ショックのあまり体が大きく揺れた。☆が社長の娘と婚約したというのだ。☆に何度も電話するけれど通じない。私をなんだと思っているのだろう。☆を殺したい。殺して自分も死にたい」

○(株)くわいえつと・らいふ、オフィス

デスクに座っている亜紀とその横に立っている俊之。ふたりは昨日見たテレビの話をしている。

亜紀「最後さあ、二人でお茶飲みに行こうって出て行くでしょ。あそこで終わりだと思っただよね」

俊之「あのオチにはだまされたよな。俺、ふとんの中入ってからもさ、思い出して笑ってたよ」

亜紀「そうそうそう、私も」

ふと窓の外を見る亜紀。

○(株)くわいえつと・らいふから見た新東洋サテライトオフィス

範子が足早にオフィスの中を歩いている。

並木が範子にコピーを頼もうと書類を渡そうとするが、範子はそれを無視して自分のデスクに戻っていく。

「なんだあれ」と範子を睨む並木。

森川が並木のところにやってきて「僕がやりましょう」と書類を受け取る。

自分のデスクに座る範子。

呼吸を整えると、デスク下に置いたバッグから何かを取り出す。

それは太陽に反射して「ピカッ」と光った。

それをデスクの引き出しの中に入れる範子。

○(株)くわいえつと・らいふ、オフィス

窓から外を見ている亜紀。

俊之「どうしたの？」

亜紀「・・・miss-jonely か包丁持っていたような・・・」

俊之「ええ？本当？」

亜紀「・・・なんとなく」

俊之「考えすぎだろ。殺したいって口にするくらい誰にだってあるよ。

自分だって浅野さんのことぶっ殺すって言ってるじゃねえか」

亜紀「そうかなあ・・・」

俊之「本当に殺すつもりだったらホームページなんかにか書かないよ」
亜紀「でも最近の miss-Jonely、絶対様子へんだよ」

○ 新東洋サテライト、オフィス

ワンシーン・ワンカットで。

エレベーターを降りてオフィスに戻ってくる範子。

手には会社に届けられた台の上で郵便物を持っている。

入り口付近に置かれた台の上で郵便物の仕分けをする範子。

直美がオフィスに入ってきて、範子に話し掛ける。

直美「すみません」

範子は仕分け作業を続けながら

範子「・・・何か」

直美「星山さんいます？」

範子「いませんけれど」

直美「・・・じゃあ遠山は？」

範子「いません」

直美「どこに行ったの？」

範子「知りません」

直美「社長の行き先も知らないの？」

範子「・・・」

直美「あなた、なんていう名前？」

範子「服部です。服部範子。あなたは？」

直美を睨みつける範子。

直美「何、あなた、その態度？ちゃんと教育受けてんの？私のこと知らない

わけないでしょ？」

範子「あ、そう」

範子、仕分けされた郵便物を持ってその場から去っていく。

直美「・・・感じわるい」

オフィスから出て行く直美。

範子、鈴江のところに郵便を届ける。

鈴江「サンキュー。あのさ、今の星山くんのこれ？」

小指をたてる鈴江。

範子「さあ」

鈴江「私もお茶出したことあるけど、なんか嫌な女だよ。私は上流階級ですって感じですよ」

並木の怒鳴り声がオフィスに響く。

並木「お前ちよつとは会社の役に立ったらどうだ！」

範子、並木の声のした方を見る。

神田が並木に呼ばれて叱責されている。

並木「会社はなあ、慈善事業でお前に給料払ってるわけじゃねえんだよ。お前給料に見合うだけのことしてんのか？え？」

神田「でもそんな話は聞いてなかったです」

並木「聞いてないじゃねえんだよ。教えてもらうのを、ぼけーっと待ってるんじゃないくて、まわり見て自分で考えろよ」

裏口が開き、社長、その後ろを歩く星山がオフィスに入ってくる。

並木、社長を見る。

並木「お帰りなさい」

社長「並木くんちよつと」

並木、神田を追い払い、社長のもとに走っていく。

社長、並木、星山が輪になってなにか話しだす。

神田たちを見ている範子と鈴江。

鈴江「神田くんかわいそうだよね」

範子「そうだね」

鈴江「並木って最低だよ。遠山さんの子分だから出世したようなもんでしょ。あいつに能力があるなんて誰も思ってないっつうの」

範子、ふたたび歩き出す。

森川が範子に話し掛ける。

森川「服部さん」

範子「はい」

森川「この間のこと考えてくれた？」

範子「まだちよつと……」

森川「南博みなみひろしってすごいいいピアニストなんだ。絶対損はさせないよ」

範子「でも来月の予定まだわからないし」

森川「やっぱり俺と一緒にじゃだめ」

範子「そんなことないけど……」

森川「俺いい加減な人間じゃないよ」

範子「それは……知ってるけど」

森川「……ごめん、こんなところで」

範子「じゃあ、もう一回考えさせて」

森川「わかった」

去っていく森川。

由香里のデスクでき仲田が張り付くように、彼女の横に座って話し掛けている。

仲田の話に鬱陶しそうに聞いている由香里。

仲田「もうひとつ裏技を伝授してあげるよ」

由香里「明日までに仕上げなきゃいけない事があるんですよ」

仲田「知っておくと便利だよ」

由香里「今ちよつと忙しいんで・・・」

範子「すいません」

範子、由香里に来た郵便を渡す。

由香里「ありがとうございます」

由香里、仲田に気づかれぬようにさりげなく範子にメモを渡す。

範子、仲田に来た郵便を渡そうとする。

仲田「机の上置いといてよ」

範子「わかりました」

仲田「それでさ、P C Aの水野さんからの電話とったの服部さん？」

範子「そうです」

仲田「メモ置いとくだけじゃなくて、帰ったら一声かけてくれる」

範子「すみません」

仲田「それにさ、向こうの電話番号聞かなかったの？そういうのって常識じゃないの？」

範子「・・・気をつけます」

仲田「別にいいんだけどさ」

仲田、由香里の方を向き直る。

仲田「それでここみたいにさ、文が長くなることあるでしょ。こういうときってA L T、半角で二段にできるんだ」

由香里「そういう話はまた今度教えてください」

去っていく範子。

郵便物を配りながら歩いていく。

範子の前を遠山が通りすぎようとする。

範子「あ、社長」

遠山「ん？」

範子「さっきお嬢さんがいらっしやいました」

遠山「あ、そう」

範子、由香里から渡されたメモを開く。

「遠くから呼んで」と書いてある。

範子、由香里の方を見る。相変わらず仲田が彼女に話し掛けている。

範子「由香里ちゃん」

由香里「あ、はい」

由香里、席を立てて範子のもとに走ってくる。

由香里「あいつどうにかしてくださいよ。気持ち悪い」

範子「はつきり言ったほうがいいんじゃないの」

由香里「何度も言ってますよ。あいつ、知らないところで私のメール勝手に開いてるんですよ」

範子「嘘でしょ」

由香里「この会社の人たちが絶対知らないようなこと、知ってますもん」

範子「ええ？」

由香里「仕事にならないですよ。服部さん、ちょっとパソコン貸してくれませんか？」

範子「あ、いいよ。使って」

由香里「どうもすみません」

郵便物を配って回る範子。

星山が本棚のところで資料を読んでいるのが見える。

星山の方にむかって歩いていく範子。

神田が並木のデスクの前に立つ。

神田「会社は慈善事業じゃないって言いましたよね」

普通じゃない雰囲気気づいた範子。神田のほうを見る。

並木「なんだ？」

神田「だったら残業代ちゃんと払ったらどうなんだ！こっちは自分時間潰して働いてんだぜ」

並木「誰にむかって口聞いてんだ」

神田「お前社長に尻尾ふることしか脳がないくせに、偉そうなこと言ってるじゃねえぞ」

仲田と森川が神田を止めに来る。

仲田「やめろ、神田」

並木「文句があるんだったら辞めてもいいんだぞ」

森川「神田、こらえろ」

神田「辞めてやらあ。お前みたいな奴の下で働けるかってんだ」

仲田「神田」

神田「明日、辞表たたきつけてやる」

去っていく神田。ロッカーから自分の荷物を取ると会社から出て行く。

森川「並木さん、ちよつと彼のこと追い詰めすぎですよ」

森川、神田を追いかけていく。

森川「おい神田、待て」

範子、顔を星山のほうに戻す。

星山、資料を広げながら神田たちを見ている。

星山、範子の視線に気づき、彼女のほうに顔をむける。

ふたりの目と目が合うが、星山が顔をそむける。

範子、星山のほうに歩いていく。

範子「星山くん」

星山、鬱陶しそうに範子のほうを見る。

範子「今、いい？」

星山「忙しいんだ。後にして」

範子「なんでいつもそうやって避けるの？」

星山「……今日仕事終わってから時間作るから、その時にしてくれないか」

星山を見つめる範子。

○ 栞くわいえつと・らいふから見た新東洋サテライトオフィス、夜

定時が過ぎ、次々に帰っていく社員たち。

○ 栞くわいえつと・らいふ、オフィス

亜紀と俊之、ふたりしか残っていないオフィス

会社に残って窓から外を見ている亜紀。

残業をしている俊之。キーボードを打つ手を止めて亜紀を見る。

あきれた顔をしながらため息をつき、再びキーボードを打ち始める。

○ 栞くわいえつと・らいふから見た新東洋サテライトオフィス

星山と範子がふたりきりで話している。

それはやがて言い争いにかわる。

○ 栞くわいえつと・らいふ、オフィス

亜紀は窓から外を見ている。

亜紀「ねえ、やばいよ」

パソコンを打ち続ける俊之。

俊之「何もおこらないって」

亜紀「miss-lonely 相当思いつめてるよ」

俊之「そんなに心配だったらさ、向こうのビルに電話してみたら？警備員とかいるだろ」

亜紀「ダメよ。あの人捕まっちゃうじゃない」

俊之「・・・」

亜紀「ねえ、私行つて来る」

席を立ち、走って出て行く亜紀。

俊之「おい、古内」

亜紀、オフィスから出て行く。

俊之「馬っ鹿だなあ」

俊之、ふたたびパソコンのキーボードを打ち始める。

○ ビルの外

赤信号に止められていらいらする亜紀。

青になると猛然とダッシュする。

○ 西劇ビル

亜紀、ビルの中へかけこんでくる。

フロアには警備員、進藤武雄(33)が立っている。

亜紀「お疲れ様です」

通り過ぎようとする亜紀。

進藤「あ、ちよつと、すいません」

立ち止まる亜紀。

進藤「何の用でしょうか？」

亜紀「あのお、忘れ物しちやったんです」

進藤「どちらにいかれるんですか？」

亜紀「・・・4階です」

進藤「4階のどちらに？」

亜紀「・・・え？」

進藤「なんという会社に行かれるんですか？」

受付横に飾られたフロア表が亜紀の目に入る。

「4Fやながわコーポレーション(株)」と札がかかっている。

亜紀「・・・『やながわコーポレーション』です」

進藤「失礼ですが、社員証を見せていただけますか。決まりですので」

亜紀「デスクの中なんですよ。財布忘れちゃって、その中にあるんですよ」

進藤「……ないんですよ」

亜紀「え?……」

進藤「やながわコーポレーションでは社員証は作ってないんです」

亜紀「……」

進藤「あなた何者ですか?」

亜紀「……」

亜紀「いやあ、実はですね」

亜紀、進藤をつきとぼし、彼はよろける。

走り出す亜紀。

立ち上がり追いかける進藤。

進藤「待ちなさい!」

○エレベーターホール

4つ並んでいるエレベーターの一つが開いている。

その中に飛び込む亜紀。

「閉」ボタンを押しつつける。

進藤がこつちにむかって走ってくる。

閉まりかけるエレベーターの扉。

進藤、警棒をエレベーターに入れ込み、扉は再び開く。

亜紀、進藤の腕をつかみ、引っ張る。

タイミングを崩された進藤は、エレベーターの中に倒れこむ。

亜紀はエレベーターから出る。

エレベーターの扉が閉まる。

○エレベーターの中

進藤「2階」のボタンを押すが、ランプはつかない。

階表示ランプの上に「このエレベーターは9階まで止まりません」の文字。

進藤「3階」「4階」とボタンを何度も押すが、ランプはつかない。(9階まで止まらないことを知っていてやっている)

○1階、エレベーターホール

2階から9階まで停車するエレベーターに乗る亜紀。

6階を押し、何度も「閉」を押す。

閉まるエレベーター。

○新東洋サテライト、オフィス

範子のデスクのそばで言い争いをしている範子と星山。

範子「……いまなんて言ったの？」

星山「お前につきまとわれてずっと迷惑していた、って言ったんだ。俺はお前のことを愛していないし、今までにも愛したことは一度もなかった」

範子「……ひどい」

範子、机の中を開け、昼間中に入れたものを手に取り、星山にむかって投げつける。

星山、よける。

鏡がデスクに当たって割れる。星山が神戸でプレゼントしたものだ。

星山、足元に落ちた鏡の破片を範子に蹴り返す。

星山「言いたいことはすんだか？じゃあ、俺たちこれっきりにしよう」

範子「……ばらしてやる。私たちのこと全部ばらしてやる」

星山「やってみるよ。お前が笑いものになるだけだぜ」

範子「これを忘れたとは言わせないわよ」

範子、ポケットから封筒を取り出す。

星山「……」

範子『いつか結婚したいね』ってあなた書いたわ。婚約不履行で裁判起こしてやる」

星山「……勝てると思ってるのかよ」

範子「そんなこと構わない。私たちのことが公になったらそれでいいの。社長長の耳に入ればそれでいいの」

星山、範子のところに来る。

星山「返せ！」

星山、範子から手紙を奪い取ろうとする。

範子「いや」

星山、範子の腕をつかむ。

手紙を握り締めて離さない範子。

星山、無理やり範子の手から手紙を抜き取る。

範子、手紙を奪い返そうと星山をつかむ。

星山、範子の体を力一杯押す。

突き飛ばされた範子、柱に強く頭を打ち付ける。

「ゴン」と鈍い音が部屋に響く。

倒れる範子。動かない。
範子を見る星山。

○(株)くわいえつと・らいふ、オフィス
窓から外を見ていた俊之。

俊之「やっべえ」

携帯電話を取り出し、亜紀に電話をする。
着メロが亜紀の机の上から聞こえてくる。
彼女は携帯を忘れていったのだ。
立ち上がり、オフィスから走り出て行く俊之。

○新東洋サテライト、オフィス

星山「おい！・・・範子！」

呼びかけながら恐る恐る範子に近づいて行く星山。
範子、動かない。

星山、人の気配に気づき振り返る。

亜紀が立っている。倒れている範子を見ている。

亜紀、顔を上げ星山と目が合う。

亜紀「・・・あなたが殺したの？」

亜紀、恐怖の表情で後ずさりすると、きびすを返して走り出す。

星山「待てよ！」

走り出し、亜紀を追いかける星山。

○同、エレベーターホール

エレベーターホールに走り、「下」ボタンを何回も押しつづける

亜紀。

星山がこっちにむかって走ってくるのが見える。

亜紀「来ないで。人殺し」

同じ階にある隣の会社は、皆帰ってしまい暗くなっている。

亜紀、ドアを開けようとするが鍵が掛かっている。

亜紀、再びオフィスの中に逃げていく。

○同、応接室

応接室の中に逃げ込み、鍵をかける亜紀。

部屋の中を見渡すと、電話が目に止まる。

受話器を取って、プッシュしようとしたその時・・・。

いきなり、電話が宙に浮き、亜紀の手から離れる。

○同、オフィス

応接室の電話線を引つ張る星山。
電話線が電話から外れる。

○同、応接室

線の外れた電話機が亜紀の足元に落ちる。
亜紀、わなわなと振るえている。

亜紀「ああああああ！」

○同、オフィス

応接室の中から亜紀の叫び声が響いている。

亜紀「助けて！誰か来て！」

星山、一瞬どうしたらいいのかを考える。
何か思い浮かぶと、給湯室に走る。

○同、給湯室

星山、食器棚の引出しを次々と開け何かを探している。
星山、果物ナイフを見つけると、それを持って給湯室から出て行く。

○同、オフィス

果物ナイフを持った星山。
応接室の壁によじ登り、天窓から中に入ろうとする。

○同、応接室

星山の手が天窓に差し掛かっている。
部屋の奥に、後ずさりしながら叫ぶ亜紀。

亜紀「お願い！来ないで！」

星山、天窓を越えて中に入ってくる。
星山、ナイフを構えながら亜紀に近づいてくる。
亜紀、ナイフを見つめ、恐怖のあまり声が出ない。
星山、興奮している。自分のしている重大さがだんだんわかってきた。

星山「(亜紀にむかって)落ち着けよ！……俺は今、なにをやっているん

だ!？」

○エレベーターの中

俊之がいらいらしながら階表示ランプを見ている。

3 F、4 F、5 F・・・

6階に着き、ドアが開くと猛然とダッシュする俊之。

○新東洋サテライト、オフィス

中に入ってくる俊之。誰の姿も見えない。

応接室とは反対側奥の倉庫まで走り、誰もいないことを確認する。

戻る途中に倒れている範子を見つけ、かけよる。

俊之「どうした! しっかりしろ」

範子「ううん・・・」

きつと亜紀にも危機がせまっている・・・

俊之「古内い!」

俊之、オフィスの逆サイドに走り、応接室隣にある会議室のドアをあける。誰もいない。

応接室のドアのノブに手をかけたその瞬間・・・

星山「うわああああ!」

いきなり応接室のドアが開き、ナイフを持った星山が低い体勢で突進してくる。

ナイフが俊之の足に刺さる。

太腿を押さえて倒れる俊之。

俊之の流した血を見て怯える星山。

人を刺してしまった・・・後ずさりする星山。

俊之、痛みをこらえて立ち上がる。

星山、亜紀のもとに行き、彼女にナイフをつきつけて俊之を睨む。

星山も泣きそうな顔だ。

星山、力の限り叫ぶ。

星山「お前ら、誰なんだ!？」

亜紀は「助けて」という目で俊之を見ている。

俊之、星山を見つめる。こういうときどんなことを言ったらいいのだろうか・・・

俊之「お前、あの女殺しただろう」

激しく首をふる星山。

俊之「その娘を刺してみろ。無期懲役は食らうぞ」

星山「ええ?!」

俊之「今、放せば、15年ですむ」

星山「・・・(しばらく考えて)一緒じゃねえか!」泣きそうな星山。

俊之、星山にとびかかる。

床にしゃがみこんで格闘するふたりを見る亜紀。動けない。

足を怪我している俊之はやはり不利だ。星山が俊之の上に馬乗りになった。

ナイフをふり下ろそうとする星山の右手を、俊之の左手がつかんでいる。

俊之、力尽き、手を離す。ナイフがふり下ろされる。

亜紀「・・・!」

ナイフ、床につきささる。

それを星山が再びふりあげる。そして・・・。

進藤「うおおおおお!」

警備員、進藤が猛烈な勢いで中に入ってきて、星山にタックルをあびせる。

ナイフは床に転がり、星山は進藤に押さえられる。

進藤、星山の腕を背中にもわしてつかみながら、無線を取り出す。

進藤「こちら6階、新東洋サテライト。傷害事件発生です。大至急救急車と応援頼みます」

抵抗しない星山。

俊之、亜紀に近寄っていく。

亜紀を見つめながら

俊之「怪我はなか・・・」

ドサツ。

俊之、その場に倒れる。

俊之の手には血がべっとりついていて。腹を刺されたのだ。

亜紀「宮本君!」

亜紀、俊之にかけより、彼を抱き上げて頭を自分のひざの上に乗せる。

亜紀「宮本君。しっかりして」

俊之「……よかったよ。俺、古内のこと守れたんだな」

亜紀「しゃべらないで」

俊之「本当のこと言うよ……俺、古内のこと、ずっと前から……」

俊之の意識が薄れていく。

亜紀「いや！宮本君！」

俊之、目を閉じる。

フェイド・アウト

○(株)くわいえつと・らいふ、オフィス

フェイド・イン

2週間後。

仕事を中断し、席を立つ俊之。トイレに行こうとしているのだ。

松葉杖を使い、痛々しそうな俊之を、亜紀は少し心配そうに見つめる。

浅野がオフィスに入ってくる。すれ違う俊之に話し掛ける。

浅野「大丈夫か？」

俊之「ええ、なんとか生きてます」

浅野「でも良かったよな。デスク残ってた」

浅野、デスクに戻ってくる。

浅野「古内くん。君に頼んだ予算編成表、また間違ってたよ」

亜紀「……はあ」

浅野「もつとちゃんと仕事してくれないかなあ！俺が部長からなんて言われているのか、君にも聞かせてやりたいよ」

亜紀「すいませーん」
浅野「部課長会議、明日だよ……勘弁してくれ」

浅野、椅子に座ると大きいため息をつく。

机の上の写真立てが伏せられている。それを手にとる浅野。

娘の写真だと思っただと見ると……

キャバクラ嬢「マリナちゃん」の写真が上からはられている。

びっくりする浅野。

疑いの眼差しで亜紀を見る。

浅野の背後からクスクスと笑い声が聞こえてくる。

後ろを振り返る浅野。

社員たちが皆笑いをこらえている。

恥ずかしさでいっぱい浅野。「マリナちゃん」の写真を取って、

丸めて捨てる。

「何も知りません」というすました顔をして仕事を続けている

亜紀。

遠くから「ドサッ」という音。

俊之「痛ってえ」

俊之がつまづいて転んだのだ。

亜紀「もう、何やってんのよ」

亜紀、立ち上がり俊之のもとに駆け寄る。

亜紀「もっと家でおとなしくしてればいいのに」

俊之「そう何週間も休めねえよ」

亜紀、松葉杖を拾うと、俊之に肩を貸し、起こしてやる。

まわりに聞こえないような小さな声で。

亜紀「痛い？」

俊之「ちよっただけ」

亜紀「でもよかったよ。本当に。死んじやったらどうしようって思った」

俊之「こつちも悪かったな。病院で徹夜させちゃったりして」

俊之「……終わったら飯でも食べにいかない？」

亜紀、自分の肩に乗っていた俊之の腕をふりほどき、持ってい

た松葉杖を渡す。

亜紀「いつまでもたれてんのよ」

俊之「……」

亜紀、窓の外を見る。

亜紀「あ、あれ見て」

○ 株くわいえつと・らいふ、オフィス

頭に包帯を巻いた範子に森川が話し掛けている。

○ 株くわいえつと・らいふ、オフィス

窓から外を見ている亜紀と俊之。

○ 株くわいえつと・らいふ、オフィス

亜紀「彼女も最近戻ってきたの」

俊之「はやく元気になればいいな」

頷く亜紀。

亜紀「……ねえ」

俊之「ん？」

○ 株くわいえつと・らいふ、オフィス

○ 株くわいえつと・らいふ、オフィス

○ 株くわいえつと・らいふ、オフィス

○ 株くわいえつと・らいふ、オフィス

○ 株くわいえつと・らいふ、オフィス

○ 株くわいえつと・らいふ、オフィス

○ 株くわいえつと・らいふ、オフィス

○ 株くわいえつと・らいふ、オフィス

亜紀「……牡蠣鍋かきなべ食べたい」

俊之「え？」

一瞬怪訝そうな顔をする俊之だが、意味がわかると嬉しそうに微笑む。

俊之を見て微笑む亜紀。

○新東洋サテライト、オフィス

範子、会社に来た郵便物を仕分けしている。

その中に一枚の絵葉書が届いている。

エドワード・ホッパー「ニューヨークの映画館」

範子、裏を見る。

「Dear miss-lonely。そのうちいつかあるよ。頑張って」
差出人は書いていない。

範子「……?」

終